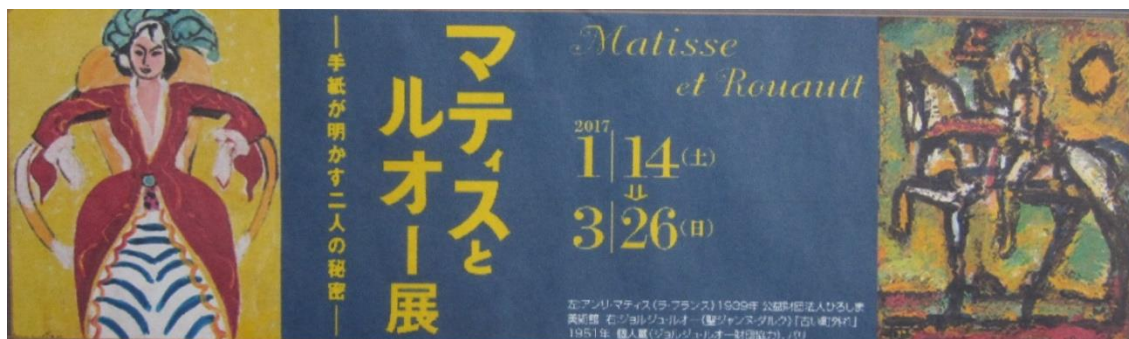


マティスとルオー展 ―手紙が明かす二人の秘密―

パナソニック汐留ミュージアム（新橋） 2017.01.14～03.26

あべのハルカス美術館（あべのハルカス 16階） 2017.04.04～05.28



「マティス」(1869～1954)と「ルオー」(1871～1958)は、共にギュスターヴ・モロー教室で学び「理知派」対「ロマンティスト」の同級生対決とされている。

「マティス」は、“補色関係を巧妙にずらしつつ、配色を決める画業は音楽を組み立てるように理詰めで軽快、理知的で、形と色の探求の末に、色紙を切った絵をリトグラフにする”などで、早々に売れっ子になった画家である。

一方、「ルオー」は、絵具を塗っては迷い、削り取らずにさらに載せ、厚切りで重厚な制作で「キリスト教的主題や道化師などを情緒的に描き、二人は同門ながら全く異なる作風を追求して、お互いに嫉妬したり認め合ったりしながら、家族ぐるみの友情は50年余りの生涯にわたって続いたとされている。

< 展覧会の見どころ >

1. 貴重な油彩画や直筆の手紙の初来日。

ルオーの《(学者たちの間の幼児イエス)のための習作》(1894)、《聖ジャンヌ・ダルク》「古い町外れ」(1951) (写真右側)などの「4点」の絵画と「3点」のタブスリーに、マティスからルオー宛てた直筆の手紙「2点」が初来日。

2. 世界初のルオーの『気晴らしシリーズ』の油彩画「15点」の一举展示に加えて、この作品を原画に制作された美しい「版画集」が展示。
3. 二人の知られざる友情と、絵に秘めた思いが明らかにされる。

延べ50年に及ぶ手紙のやり取りを手がかりに、家族ぐるみの友情の軌跡をたどり、マティス《ラ・フランス》(写真左側)やルオー『気晴らしシリーズ』などに、彼らが共に大切にしていた“祖国への愛”を見出す。

この《ラ・フランス》は、1939年第二次世界大戦勃発後フランスがドイツに宣戦布告した年の暮れに制作され、女性はフランス国旗の色、自由・平等・博愛を示す3つの色で彩色された衣装をまとっている。祖国の危機に際し、その文化、芸術への誇りを毅然とした女性像に託した作品である。